

# 傍観者としての語り手

—— 国木田独歩「竹の木戸」と田榮澤「ファースブン」 ——

丁 貴 連

## 一、「貧民」の発見

日清戦争後、明治政府は清国から得た莫大な賠償金をもとに産業の振興を積極的に推進した。その結果、欧米先進諸国が二〇〇年から三〇〇年を要した産業革命を、わずか半世紀という極めて短期間で成し遂げた。しかし、性急な近代化は、様々な社会的矛盾を露呈・拡大させ、足尾鉾山の鉾毒事件や紡績女工の悲惨な状態が深刻な社会問題となりはじめた<sup>①</sup>。とりわけ、東京などの大都市には下層民ばかりが住む貧民窟があちこちに出現するなど、「貧困」が新たな社会問題として浮上してきた。

このような社会情勢を背景に、文壇には、社会・経済的に抑圧された労働者や農民の姿、社会の底辺に取り残された人々の姿を写したり、あるいは社会の裏面に隠された醜悪な現実を暴露したものが現われた。桜田文語の『貧天地餓寒窟探検記』（明治二六年）、国民新聞記者、松原岩五郎の『最暗黒の東京』（明治二六年）、東京日々新聞記者、横山源之助の『日本の下層社会』（明治三二年）などといった下層社会を描いたルポルタージュである。桜田と松原は、当時東京の三代貧民窟であった下谷区万年町、四谷区鮫カ橋、芝区新網町を实地探検し、都市の貧民層の悲惨な状態を告発した。また、横山は都市や農村の貧民・小作人・職工などの生活を調査し、その実態を暴露した。

桜田や松原、横山らの貧民、下層社会への関心の表明ないし实地踏査のルポルタージュの出現は、封建的な小市民的社会観に基づいた硯友社文学の偏

狭な人情小説に飽きていた小説家達に、文学の新たな可能性を切り開いて見せた<sup>②</sup>。広津柳郎、泉鏡花、川上眉山、小栗風葉、樋口一葉、国木田独歩、田岡嶺雲などは、桜田や松原らのスラム探訪報告の影響を受け、従来の小説には決して描かれることのなかった下層民の深刻かつ悲惨な生涯や事件を描いて、近代日本文学においてはじめて「貧民」および「貧困」というモチーフを発見した<sup>③</sup>。

ところで、「貧困」および「貧民」は近代韓国文学を語る場合においても最も重要なテーマのひとつである。近代化に乗り遅れた韓国は、いち早く資本主義経済を導入して産業革命を成し遂げた日本にとって経済進出に格好の国であった。一九一〇年、韓国が日本の植民地に転落すると、日本は併合前から行っていた土地調査事業を強化するなどして本格的な経済収奪に乗り出した。その結果、韓国の農民の七割が小作農に転落し、小作農の大半は農業の出来なくなった故郷を離れねばならなかった。彼らは満州などへ移住して中国人の小作人になったり、あるいは都市に出て最下層の都市労働者になったりした。ソウルをはじめ各都市には貧民窟ができ、乞食同様の悲惨な生活を送る土幕民と呼ばれる貧民層が現れた<sup>④</sup>。『東亜日報』や『開闢』などのジャーナリズムでは、集中的に貧困や貧民問題を取り扱い、同時代の知識人や作家に貧困や貧民への関心を促した。

このようなジャーナリズムの動向に対して文壇も黙っていないなかった。玄鎮健、田榮澤、廉想渉、金東仁、羅稻香、崔曙海、金基鎮、李箕永、李益相、

朱耀燮、宋影らは、故郷を離れて異国や異郷を彷徨う農民や小作人、工場労働者、都市の下層労働者の悲惨な生活を暴露した<sup>90</sup>。とりわけ、崔曙海の小説は、田榮澤ら貧窮を知らない日本留学経験者の書いた作品とは一線を画していた<sup>91</sup>。彼の描いた貧窮は裕福な家庭のお坊ちゃんたちが頭の中で「想像」した世界ではなく、彼自身が体験した現実であった。想像を絶する現実を目の当たりにした文壇は、その凄惨な人生に身震いをし、驚愕した。崔曙海の作品は文壇にセンセーションを巻き起こし、彼は一躍文壇の寵児となった。いわゆる韓国文学における「貧困」の発見である。

このように、近代化は「貧困」という新しい問題をもたらし、各国の作家が文学のテーマとして取り上げるようになったのである。これは偶然の一致というよりも、いわば時代の要請であったといわねばならないであろう。

ところが、こうした貧困問題を、当時新たな階層として台頭しつつあった中産階級との対比という視点で捉えた異色の作品が日本と韓国に存在する。国木田独歩の「竹の木戸」(『中央公論』一九〇八)と田榮澤の「ファスブン」(『朝鮮文壇』一九二五)である。独歩の「竹の木戸」は、東京を舞台に、貧困にあえぐ植木屋夫婦が、貧しさ故に盗みを働いて自殺に追い込まれる悲劇を、隣に住む中産階級の一家との比較を通して淡々と語った作品である。田榮澤の「ファスブン」も、同じくソウルを舞台に、貧困にあえぐファスブン一家がやむを得ず我が子を里子に出したことを苦に凍死する悲劇を、隣の小市民的生活をしている会社員の家庭と対比しながら冷静かつ客観的に語った作品である。

近代化の進展にともなって貧富の差が拡大し、社会は勝ち組と負け組にはっきりと二極分化されていった。「竹の木戸」と「ファスブン」は、そういった社会状況を、社会の主流になりつつあった中産階級の目を通して淡々と語ることによって、より巧みに貧困を浮き彫りにした作品である。と同時に、貧困層と関わりを持つとうとしない中産階級の人たちの認識をも描いた小説でもある。以下、本稿では「貧困」を軸として、日韓両国で台頭しはじめた中産階級が、「事なかれ主義」の傍観者になっていく過程を探りたい。

## 二、都市の憂鬱

田榮澤は「ファスブン」を執筆する前に、実は独歩の「春の鳥」(一九〇四)を翻案している<sup>92</sup>。こうした指摘をふまえながら、「竹の木戸」と「ファスブン」を読んでもいくと、両作品はきわめて似ていることに気づく。まず最初に、金持ちというほどではない中流家庭と、その家の下男部屋に住む貧しいファスブン一家とを対比し、都市の底辺に暮らす下層民のどん底の貧しい生活を見つめていること。二番目に、どん底の貧しい生活を送るファスブン夫婦が迫ってくる冬を前にして子供だけは飢え死にさせまいと我が子を里子に出してしまい、そのことへの罪悪感から死を迎えること。三番目に、こうした貧しいファスブン一家の境遇に同情しながらも、彼らの生活に深入りしようとなない中産階級の人々の傍観者的意識を描いていること等である。とりわけ、若いファスブン夫婦が貧困と寒さのために結局は自殺を余儀なくされるという小説全体のプロットは全くといってよいほど類似している。そこでまず、ここでは都市の最下層に生きる極貧階級の人たちが貧困故に自殺を余儀なくされる、そのいかんともしがたい現実に注目したい。

### その一、どん底の貧困

「竹の木戸」と「ファスブン」は、どちらも経済的に安定した中流家庭と、社会の最下層に住む夫婦とを対比させて、その中から都市の貧民のいかんともしがたい現実を見つめた作品である。「竹の木戸」は、貧しさから炭を盗み、それに気づかれた植木屋職人の女房が、夫も盗みを働いたことを知り、結局はそれを苦に首をくくってしまう。一方「ファスブン」では、貧しさに耐えかねた若い夫婦が、子供だけは飢え死にさせまいと、長女を人に預けてしまい、それを苦に道端で行き倒れになる。今では想像もつかないことであるが、一九〇〇年代、一九二〇年代当時においては、貧しさゆえに泥棒や強盗をしたり、妻や子供を売り飛ばしたりすることは決して珍しいことではなかった<sup>93</sup>。そうしなければ、死が待っているだけであった。それほど彼らはいかんともしがたい現実に直面していたのであるが、「竹の木戸」では、こうし

た都市に生きる貧しい人たちの極限状況を、まず住居環境という面から取り上げてみる。

生垣一つ隔て入物置同然の小屋があつた。それに植木屋夫婦が暮らして居る。亭主は二十七八で、女房はお徳と同じ年輩位、(中略)

初め植木屋夫婦が引越して来たとき、井戸がないので何卒か水を汲まして呉れと大庭家に依頼みに来た。大庭の家では其は道理なことだと承諾してやつた。(一三三—一三四頁)

植木屋夫婦の住まいは「物置同然の小屋」である。当時、都市に集まる人々は、貸家生活を経て裏長屋へ、さらに貧民窟から乞食へと転落していくのが常であつた。「物置同然の小屋」は裏長屋にも住めないということの意味しているのであるが、「竹の木戸」の作者は、植木屋夫婦を「物置同然」の小屋に住まわせることによって彼らの貧しさ、下層民の悲惨な生活をより一層強調している。が、都市下層民の悲劇はそれだけではない。植木屋夫婦の家には井戸がないのである。人間が生きていくうえで最低限必要な水がないとは、植木屋夫婦の生活がもはや貧乏を通り越してほとんどルンペンと化していたことを端的に示している。幸い隣家の配慮で水は得られたものの、植木屋夫婦の生活がすでに絶望的な状況であることを、次の文は雄弁に物語っている。

火鉢に炭を注がうとして炭が一片もないのに気が着き、舌鼓をして古ぼけた薬鐘に手を触つて見たが湯は冷めて居ないので安心して「お湯は熱の中に早く帰つて来れば可い。しかし今日若か前借して来て呉れないと今夜も明日も火なしだ。火ぐらひ木葉を拾つて来ても間に合ふが、明日食ふお米が有りやしない」と今度は舌鼓の代に力のない嘆息を洩らした。髪を乱して、血の気のない顔をして、薄暗い洋燈の陰にしよんぼり座つて居る此時のお源の姿は随分憐な様であつた。(一三七頁)

植木屋夫婦の家には家財道具らしきものはほとんどない。あるものは「古ぼけた薬鐘」と垢で板のように堅くなつた煎餅布団一組だけである。それに「物置同然の小屋」と貰い水とくれば、植木屋夫婦の生活は、女房のお源の言葉を借りるまでもなくほとんど「乞食同然」の暮らしである。当然ながら彼らはその日の食べ物にもこと欠いている。親方や同僚から前借りや借金をしているが、それさえもほとんど生活の足しにならないひどいどん底の貧しさである。

当時、東京などの大都会には、植木屋夫婦のようにろくな家財道具もなく豚小屋のような掘つ建て小屋で綱渡りのな生活をする人は少なくなかつた。横山源之助の『日本の下層社会』によれば、木賃宿を転々としながら残飯を奪いあつて食べ、蚤や虱や皮膚病に苦しみ、汚水にまみれて生きている人が、東京だけでも何十万人もいるという。つまり、「竹の木戸」に描かれた植木屋夫婦の極貧生活は、決して特別なものではなく、当時下層社会のいたるところで繰り広げられていた普通の生活だったのである。

一方「ファスブン」はどうであろうか。次の文はファスブン一家の貧しさが、「竹の木戸」の植木屋夫婦よりも、もっと深刻な状態におかれていることを如実に表している。

アボムは今年の九月、女房と幼い娘たちを引き連れて、我が家の下男部屋に入った。年の頃は三十才くらい、背はひよる長で、脂の浮いた顔は黄色っぽく、頭には未だにマゲをつけており、目は少し大きめといった風采で、人柄はとて純朴で善良そうだった。主人を見ると、どんなときでも、例え疲れ切つて食事をしてもぱつと立ち上がり腰を屈めてお辞儀をする。(一九八頁)

ファスブンには住むところがない。そのためにファスブンは家族を連れて下男部屋暮らしを始めたのである。「竹の木戸」の植木屋夫婦が「物置同然の小屋」ではあつても我が家を持っているのに対して、ファスブン夫婦は、それすら持たず人の家の下男部屋暮らしをしなければならない。下男部屋暮

らしとは、部屋を借りられない人が家賃を払わず主人の家の仕事を手伝うことを条件に下男部屋に住まわせて貰うことであるが、社会的には行き着くところまで行った人を指す<sup>90</sup>。その下男部屋暮らしを送ることになったファスブン一家の状態はといえば、

彼らにはいま着ている単衣と小さな鍋のほかは何もない。世帯道具もなければ、もちろん着るものも、かける夜具も、飯を盛る器も、食べる匙一つもない。あるものとは、むさくるしい二人の娘と、下の子をおんぶする単衣のぼろに結え紐、アボムが稼ぎに使うチゲ（背負い子）一つ—これだけだ。飯はとりあえず主人の家で出してやった丼と匙で食べ、水は、やはり主人の家の子供が飲んだ粉ミルクの空き缶をもらって飲んだ。（一九八頁）

家財道具もなければ着るものもない。「竹の木戸」の植木屋夫婦が、物置同然の家で食うや食わず、垢染みた煎餅布団一枚にくるまって二人一緒に寝るような惨めな生活とはいえ細々と暮らしているのに対して、ファスブン一家は、たとえ主人の暖かい配慮で家財道具を借りることができても、もはや貧困を通り越してルンペン暮らしと言わざるを得ない。一九二〇年代当時、ソウルなどの大都市には、下男部屋暮らしさえできなかった人たちがルンペンとなって住む貧民窟（土幕）があちこちに出現し、貧困や衛生状態、治安の悪化が大きな社会問題となっていた<sup>91</sup>。

最近朝鮮人の生活はあまりにも情けない。毎日、新聞記事の七、八％は生活苦に関する内容で埋め尽くされている。（中略）掲載した記事のほとんどが乞食に関するものか、さもなければ、財産没収、破産、餓死、凍死などに関するものであり、また、そうでなければ生活苦のために自殺を謀った事件や強盗、泥棒に関するものであるか、それとも飢餓と寒さのために妻子や子供を平気に売り飛ばす記事である<sup>92</sup>。

これは一九二四年十二月二十九日付の『東亜日報』に掲載された社説の一部であるが、この記事によれば、一九二〇年代、三〇年代の朝鮮では、貧困は特殊なことではなく普通の現象であったことがわかる。田榮澤の「ファスブン」はこうした時代を背景にして生まれた作品なのである。

## その二、貧困を浮き彫りにする季節

ところで、こうした貧民達をさらにとん底の状況に突き落とすものがある。それは時々刻々迫ってくる冬という季節である。「竹の木戸」と「ファスブン」は、都市下層民の苦しさをよりいっそう浮き彫りにするために、冬の最も寒い時期に物語を設定している。「竹の木戸」は、大庭家の隣りに引越して来た磯吉夫婦が、井戸を使わせてくれと頼みにきてから二ヶ月が過ぎた十一月の末から本格的に物語が始まる。水を汲むたびに一々大庭家の門を通らねばならない植木屋夫婦は、不便なので生け垣を三尺ばかり開けて通れるようにしてほしいと大庭家に頼み、優しい大庭家はそれを承諾する。その木戸が完成した日、磯吉の妻のお源は井戸端で竹の木戸をめぐって大庭家の女中と言ひ合う。自分の家に戻ったお源は炭どころか米も買えない状況に落胆する。そこに仕事から帰ってきた夫が二円しか前借りできなかったと言い、お源はますますがっかりする。それでもお源は夫を信じて眠りにつくが、その日は夜風が吹き込む寒い夜であった。しかしながら、お源夫婦は薄い煎餅布団一枚しか持っていなかった。

お源は垢染みた煎餅布団を一枚敷いて一枚被けて二人一緒に一個身体のやうになつて首を縮めて寝てしまった。壁の隙間や床下から寒い夜風が吹き込むので二人は手足も縮められるだけ縮めて居るが、それでも磯の背部は半分外に露出て居た。（一四〇頁）

二人が煎餅のように薄くぺちゃんこな蒲団を一枚敷いて手足を縮めるだけ縮めて寝る場面からは、彼らの置かれた状況の悲惨さが一層ありありと感じられる。しかし、これもまだ本格的な冬が始まらないうちの話である。本格

的な冬が始まれば、夫婦の体温だけでは足りなくなる。次の文はお源夫婦のような都市下層民にとって冬という季節が如何に過ごしにくい過酷な季節かということを教えてくれる。

十二月に入ると急に寒気が増して霜柱が立つ、氷は張る、東京の郊外は突然に冬の特徴を發揮して、流行の郊外生活にかぶれて初て郊外に住んだ連中を吃驚させた。然し大庭真蔵は慣れたもので、長靴を穿いて厚い外套を着て平気で通勤して居た。(一四〇頁)

つまり、大庭家のような中産階級は、急に寒くなると、「長靴を穿いて厚い外套を着」たり、蓄えておいた上等の佐倉炭を使って暖をとればいい。言い換えれば、冬を過ごすにはお金がかかるのである。しかし、その日食べるものにこと欠く下層民の植木屋夫婦には、防寒服もなければ暖をとる炭もない。もちろんそれらを買うお金などあるはずがない。とりわけ、本格的な冬が始まる十二月から一月、二月、三月は、都市の底辺に生きる貧しい人達を悩ませる辛い季節である。なぜなら、それまで炊事用に使っていた炭が、暖房用にも使われるようになるからである。お米も満足に買えない植木屋夫婦などは、寒さにこごえてそのまま凍死するか、それとも人の炭を盗んで暖をとるかしかなかったのである。結局、お源は寒さに耐えられなくなり、木戸を使って隣家の炭を盗む道を選んてしまい、それが原因で自殺を余儀なくされるのである。「竹の木戸」におけるお源の死の原因は、どん底の貧しい生活と言われているが、最終的にお源を死へと導いていくものは、ほかでもない、自然の猛威なのである。次の文は冬という季節が貧しい人たちをどん底に陥れる要因として働いていることを端的に示している。

そこで磯吉が仕事から帰る前に布団を被つて寝て了つた。寝たつて眠むられは仕ない。垢染た煎餅布団でも夜は磯吉と二人で寝るから互の体温で寒気も凌げるが一人では板のやうにしやちつ張つて身に着かないで起きて居るよりも一倍寒く感ずる。ぶる／＼震えそうになるので手足を

縮められるだけ縮めて丸くなった処を見ると人が寝てるとは承知ん位だ。(一四七頁)

これはお源が、炭を盗む現場を目撃された後、恐怖と羞恥の入り混ざった不安な気持ちをどうすることも出来ず、夫の帰りを待たずに寢床に入る場面である。お源は炭を盗んだ事実を巧く誤魔化し得たと思っていた。が、家に戻って盗んだときのことを考えれば考えるほど不安でいたたまれなくなる。その不安をうち消すために早く寢床に入ったのだが、板のように堅くて薄くなつた布団は、掛けた気はせず、むしろ起きているよりも寒く感じられる。羞恥心や罪の意識から逃れようとしたお源は、寒さによって逆に羞恥心や罪の意識を自覚させられて自殺に追い込まれていくのである。

一方、「ファスブン」においても「寒さ」は「貧困」とともに重要なモチーフとなつている。「竹の木戸」と同じく、九月に下男部屋に引越してきたファスブン一家の悲劇が始まったのは、引越してきてから二ヶ月が過ぎた十一月頃である。

いいお屋敷で欲しがってなさるから、あげなさいよ。ちゃんと育てて嫁入りさせてくださるつてよ。それに、まだ、あんたたち若い者が稼いで食っていかなきゃならないんだよ。子供をみんな抱えていちゃあ、もう時候もだんだん寒くなってくるんだし、みんな一辺に飢え死してしま  
う……。(二〇〇頁)

ファスブンの妻は知り合いの米屋の奥さんに、一家全員飢え死にするくらいなら子供を誰かにやったらどうかと相談を持ちかけられる。ひもじい思いをさせるよりは娘も幸せだろう、まして近いうちにもう一人赤ん坊が生まれる。どうしたら三人もの子供を食わせていけるだろう。ファスブンの妻は一日中考えた末、結局長女を見知らぬ人に預けてしまう。その夜、仕事から帰ってきたファスブンは、見知らぬ人に子供を渡したことを女房から聞かされて一晩中泣き続けた。こうしてはじまったファスブン一家の苦しみは、深

まる冬とともに次第に深刻になっていった。

田舎にいる兄が足のケガで動けなくなったため、その手伝いに行ったファスブンは、過労で倒れてしまい、ソウルに戻ることができなくなる。季節は「キムチをつけ込む時期はとくに過ぎ、立冬も過ぎて本当に寒い冬」となった。雪が降り積もる中、帰ってこない夫を待ちあぐねていたファスブンの女房は、「寒い冬をどう一人で切り盛りして行くか途方にくれ」て夫の後を追って田舎に行くことにした。出発は風が吹くひどく寒い朝であった。

あくる日の朝、風のひどい寒い朝だったが、ファスブンの妻は小さい子を背負って、気がかりになる物とてない下男部屋を一度振り返りながらよたよたと出ていった。

其の夜もひどく寒かった。われわれは戸をびったり閉ざし、戸の間隙には布切れをつめ布団を二枚重ねて、びったり寄り添いながら早いうちから寝た。私は寝ながら、オモムは無事に行ったのだろう、凍え死にはしなかっただろうと思った。(二〇三頁)

その夜、あまりの寒さに△私▽は、ファスブンの妻は凍死しなかっただろうかと心配するが、その△私▽はいえ、寒風が入らないように締め切った暖かい部屋で布団を二枚重ねて寝ていたのである。つまり、立冬を過ぎた寒い日でも、下男部屋に人を住まわせるだけの余裕のある△私▽は、寒さから身を守ることができる。しかし、最下層の下男部屋暮らしをしているファスブン一家には、寒さから身を防ぐようなものは何一つない。次の文はファスブン一家が寒さに対してまったく無防備な状態に置かれている様子を端的に表している。

ファスブンは、楊平を正午前に出て、日が暮れるまでには十里近く歩き、ある高い峠にさしかかった。身を切るような風が頬を打った。彼は肩をすくめ前かがみになってみると、松の木に白っぽい人影が見えた。すぐ駆け寄ると、それは次女とその母親だった。木の根元の雪の上に枝

を敷き、子供を背負うぼろ布で、ちびをしっかとかき抱き、うずくまっていた。ファスブンは駆け寄って抱きついた。ファスブンの妻は目は開いていたが、ものは言えなかった。ファスブンも口が利けなかった。二人は子供を中においてそのまま抱き合って夜を過ごしたもののようだ。(二〇四頁)

一九二〇年代当時、冬になると、各新聞の社会面には、極貧にあえぐ貧しい人たちが寒さに耐えられず凍死する事件を伝える記事が続出した<sup>40</sup>。それほど貧しい人たちにとって冬を越すのは大変なことであった。ファスブン夫婦も飢え死にしないために子供を見知らぬ人にあずけたりしたが、生活はいっこうに良くならず、途方に暮れた二人は、結局身を切るような冷たい風が吹く道端で死んでいった。「竹の木戸」のお源が、寒さにさらされて凍死するか、それとも人の炭を盗んで暖をとるかか二者択一を迫られた時、後者を選んだことに比べれば、ファスブンの凍死は潔いと言うこともできるだろう。しかし、お源も、ファスブンも、どちらも死の直接の原因は貧しいどん底の生活であり、そこに冬の寒気が容赦なく追い討ちを掛けたのである。

### その三、窮死

「竹の木戸」と「ファスブン」はともに結末が死で締めくくられている。しかもその死は、貧困によるものである。「竹の木戸」の磯吉とお源は、貧困と寒さのために盗みを働くに至り、一方、ファスブンは子供を見知らぬ人にあずけることになる。そもそも貧困の一つの表現として、「竹の木戸」では炭の値段の暴騰から炭を盗むという行為へと導いて行った。「ファスブン」では、子供の養育費が家計を圧迫することを示し、子供を里子に出す行為へとつながっていく。さらに、この「盗み」と「子供」の要素は、それぞれの主人公の負い目になり、その負い目が死に向かわせるのである。

まず「竹の木戸」から見ると、お源は寒さに耐えられず木戸を通して大庭家の炭をちよくちよく盗んでいた。ところが、ある日曜日、盗みの現場を隣家の主人真蔵に見られてしまう。炭を盗んだ事実を「巧く誤魔化し得たと思

つ」ていたお源ではあったが、家に帰ってから真蔵とのやりとりを考えてみると、

色々考へると厭悪な心地がして来た。貧乏には慣れてるがお源も未だ泥棒には慣れない。先達からちよく盗んだ炭の高こそ多くないが確的に人目を忍んで他の物を取つたのは今度が最初であるから一念其処へゆくと今まででない不安を覚えて来る。此不安の内には恐怖も羞恥も籠もつて居た。

眼前にまぎ／＼と今日の事が浮かんで来る。見下ろした旦那の顔が判然出て来る、そしてテレ隠しに炭を手玉に取つた時のことを思ふと顔から火が出るやうに感じた。(一四七頁)

やはり不安でいらなくなる。なぜなら、お源は貧乏のどん底にあつても、決して人間らしさを失っていなかったからである。しかし、寒さには勝てずつい盗みをしてしまったのである。言い換えれば、お源は自分で自分を裏切つた。だからこそ、盗みの現場を見つかつてしまうと、激しい羞恥心を覚えるのである。しまいには、大庭家にばれるのを恐れるあまり、

『真実如何しただらう』とお源は思はず叫んだ。そして叙々逆上きみになつて来た。「若しか知れたら如何する」「知れるものか彼旦那は性質が良いもの」「性質の良いは当にならない」「性質の善良のは魚鈍だ」と促急込んで独問答をして居た。

『魚鈍だ、魚鈍だ、大魚鈍だ』と思はず又叫んで『フン何か知れるものか』と添け出した。(一四八頁)

というような「自己に有利な解釈」をしてしまう。それほどお源は炭を盗んだ自らの行為を後悔し、後ろめたさを感じていた。だからこそ、これまで貧乏のどん底にあつても一度も愚痴をこぼさなかつた夫に、もっと人間らしく生きたいと泣き叫ぶのであつた。しかし、お源の叫びもむなしく、翌朝、

夫も盗みを働いたという新たな事実を知る。

『何炭を盗られたの。』とお徳は執着くお源を見ながら聞いた。

『上等の佐倉炭です。』

お源は此等の問答を聞きながら、齒を食いしばつて、蹠跟いて木戸の外に出た。土間に入るやバケツを投げるやうに置いて大急ぎで炭俵の口を開けてみた。

『まア佐倉炭だよ！』と思わず叫んだ。(一五二—一五三頁)

お源は夫の盗みを知つたその日に自殺する。それはお源の磯吉に対する信頼と、そしてそれによって保たれていたお源のプライドが崩れ落ちたからであらう。貧しいながらも、怠け者とも言える磯吉にお源が連れ添ってきたのは、磯吉はやるときはやる、頼もしい人間であると信じていたからである。それがお源のプライドで、どん底の貧乏生活をしながらも自立して家庭を持っている強さであつた。お源はそのプライドにすがつていたのである。しかし、信じていた磯吉は、やるときもやらない、楽な方に流れるいい加減な人間であつた。お源は自らのプライドに裏切られた。お徳に何を言われようと、磯吉を信じられればこそ生きていられたのだが、磯吉を信じられなくなつたら、お源には何も残っていなかったのである。

一方、「ファスブン」はどうだろう。ファスブン夫婦は苦しい生活の中、子供だけは飢え死にさせまいと、長女を里子に出してしまう。当時貧しい人たちは口減らしのために子供を里子に出したり、甚だしくはわずかなお金で子供を売り飛ばす人も少なくなかつた。ファスブン一家の貧しさを見かねた近所の人も、またファスブンの主人も、長女を里子に出したらどうかという話をするほど、子供を人に預けたり、売ったりすることはよく行なわれていた。ファスブンも妻に相談をもちかけられた時は、「俺の知つたことか。お前の良いようにするんだな」といつて半ば承諾する。しかし、いざ子供が里子に出されたことを知ると、

そのうち夜となって父ちゃんが帰ってきましたので、その話をしますと、何も言わずに、あんなに面白い泣き出したのです。(中略)

よくよくのことでもなけりや自分の子を、見ず知らずの人にやれるもんですか。どうしようもなくてそうしたんです。家においてひもじい思いをさせるよりはましかと思って、そうしたんです。(二〇一頁)

ファスブンは子供に対する申し訳なさと世間に対する恥が入り交じって泣き出してしまふ。ファスブンは今でこそ乞食同然の貧乏暮らしをしているが、父親が生きていた頃は人並み以上の生活をしていた。今も「田舎の本家に行けば、ひもじい思いなんかさせねが、こんな姿で帰るのは面目ない」といって、田舎に帰れないファスブンであった。それほどまでにファスブンには人間としてのプライドがあった。だからこそ田舎にも帰らず精一杯の見栄を張るのである。子供を自分の手で育てることも見栄の一つだった。しかし、貧しさ寒気にはかなわず見ず知らずの人に長女を預けてしまったのである。貧しさ故の仕方ない行為とは言っても、父親としての責任を果たせなかったファスブンのプライドは傷ついた。ファスブンは自らの行為を後悔し、後ろめたさに駆られるあまり、

「キドナイ、キドナイ、何処へ行った。元気でいるか……」そういってはしゃくり上げ、「あんなに食べたがった鮎玉一つも買ってやれず、甘柿一つ買ってやれないで」と声を張り上げて面白い泣いた(二〇四頁)

ファスブンは痰床でも人にやってしまったわが子の名前を呼び続けながら、自らの行為を後悔するのであった。そこに早く帰ってこなければこちらから行くという妻の手紙が届くと、ファスブンは居てもたってもいられなくなる。

「あいご、オクブンちゃんよ、母ちゃんよ」

とまたおいおい泣いた。泣いているうち、がばっと立ち上がり、ソウルの古着屋で買ってきたよそ行きの服を着、帽子をかぶった。家中の人が

懸命に引き留めるのを振り切って、柴戸の外に出ると、ファスブンは飛ぶように走り出した。(二〇四頁)

ファスブンは貧しいながらも、子と妻を愛していた。それが傍目には醜い子供であろうとも、愚かな妻であろうとも、愛していた。しかし、その愛するものを守れない自分に無力感を感じ、最後の力をふりしぼって妻と娘のところに駆けていき、妻とともに死を迎えた。それがファスブンの精一杯のプライドであった。

「竹の木戸」と「ファスブン」は、貧困の結果、植木屋夫婦は盗みを働くに至り、一方は子供を里子に出すことになる。しかし、この盗みと子供という要因は、それぞれの主人公の後ろめたさになり、その後ろめたさが死に向かわせた。お源は自らと夫の盗みによって自殺し、ファスブンとその妻は凍死する。確かに両者の「貧困」が向かう方向は違っている。しかし、貧困故に冒した自らの行為を後悔し、後ろめたさを覚え、それが死につながっているという点は共通している。しかも、それらの行為はやむ得なかったのである。それを選ばなければ、おそらく死が待っていただろう。

ここまで、都市の底辺に生きる貧しい人々を悩ませる三つの要因を中心に両作品を比較してみたが、田榮澤は「ファスブン」を執筆するにあたって独歩の「竹の木戸」の影響を受けて小説を構想していたことになるだろう。もちろん習作時代のように独歩の作品をそのまま翻案したりはしなかった。むしろ「竹の木戸」が提示した問題点を通して自らの置かれている韓国社会の問題点を浮き彫りにしようとしたというべきであろう。

### 三、傍観された貧困の現場

この二つの小説の根底に流れる貧困、やむを得ない行為、後悔、そして避けられなかった死を、それぞれの語り手は淡々と語っている。自然主義らしいと言えばそれまでだが、この二つの作品にはそれ以上に意味があると考えられる。もちろん、主観を交えない語り口が、逆に貧困の悲惨さを強調するとい



う効果はある。ただ、それだけではないと思う。語り手はその語り口以上に傍観者である。木戸によってのみ結びつく関係はまさにそうである。大庭真蔵は隣家を見ているだけである。お源の盗みの現場を見たときも、彼自身は何の行動もしない。次の文はお源の盗みの現場を目撃した真蔵が、自分の書齋に戻ってお源とのやりとりを振り返る場面である。

真蔵は直ぐ書齋に返つてお源の所為に就て考がへたが判断が容易に着ない。お源は炭を盗んで居る所であつたとは先づ最初に来る判断だけでも、真蔵は其を其儘確信することができないのである。實際ただ炭を見て居たのかも知れない、通りがりだからツイ手にとつて見て居る所を不意に他人から瞰下されて理由もなく顔を赤らめたのかも知れない。まして自分が見たのだから狼狽へたのかも知れない。と考へれば考へられんこともないのである。真蔵は成るべく後の方に判断したので、遂にそう心で決定して兎も角何人にも此事は言わんことにした。(一四二—一四三頁)

真蔵は、お源は果たして炭を盗んでいたのか、それともただ見ていただけなのか、とお源の行動についてあれこれと考へたあげく、後者だという結論をくだすのである。しかも、そのことを誰にも言わないことにする。これを真蔵の「温厚しさ」「優しさ」の表われとして解釈することもできる。が、果たして性格ということだけで片付けられる問題なのだろうか。次の文は真蔵のまた別の側面を示している。

『お宅では斯いふ上等の炭をお使ひなさるんですもの、堪りませんわね。』と佐倉の切炭を手に持て居たが、それを手玉に取りだした。窓の下は炭俵が口を開けたまゝ並べてある場所で、お源が木戸から井戸辺にゆくには是非この傍を通るのである。

真蔵も一寸狼狽いて答に窮したが、

『炭のことは私共に解らんで……』と完爾微笑て其まゝ首を引つ込めて了つた。(一四二頁)

盗みの現場を見られたお源が、その場を逃れるために「お宅は斯いふ上等の炭をお使ひなさるんですもの、堪りませんわね」と言つたのに対して、真蔵は「炭のことは私共に解らんで」といつて逃げてしまう。このお源の言葉の背景には、産業革命後の富の二極分化、すなわち炭の値が暴騰したにもかかわらず「上等の佐倉炭」を蓄えて安楽に暮らしている者がいる反面、「計量炭」も満足に買えず「泥棒」になり果ててしまった下層民の存在がある。

しかし、真蔵はそういった社会的背景には全く関心を示さず、「炭のことは私共に解らんで」といつて逃げるだけである。真蔵は、植木屋夫婦に井戸を使わせてやったり、木戸を作らせてやったりするなど彼らと関わりを持ちながらも、いざ彼らがトラブルを起すと、「どちらにしてもお徳が言つた通り、彼処へ竹の木戸を植木屋に作らしたのは策の得たるものでなかつた」と、木戸を作らせたことを後悔する。そして、しまいには植木屋とは「先ア関はんが可い」と漏らすのである。これは明らかに人と争うことを好まぬ温和な、悪く言えば事なかれ主義の性質と見ることが出来る。次の文には中産階級の「事なかれ主義の性質」が端的に示されている。

『静かに、静かに、そんな大きな声をして聴いたら如何します。私も彼処を開けさすのは厭じやつたが開けて了た今急に如何もならん。今急に彼処を塞げば角が立て面白くない。植木屋さんも何時まで彼様な物置小屋見たやうな所にも居られんで移転なり如何なりするだらう。そしてたら彼処を塞ぐことにして今は唯だ何にも言はんで知らん顔を仕てる、お徳も決してお源さんに炭の話など仕ちやなりませんぞ。現に盗んだ所を見たのでなし又高が少しばかしの炭を盗られたからつて其を荒立て、彼人者だちに怨恨れたら猶ほ損になりますぞ。真実に。』と老母は老母だけの心配を諄々と説いた。

『真実に左様よ。お徳は如何かすると当て擦りを言いかねないがお源さんに其様ことでもすると大変よ。反対に物言をつけられて如何な目に遭ふかも知れんよ、私は彼の亭主の磯が気味が悪くつて成らんよ。変妙来な男ねえ。彼様奴に限つて向ふ不見に人に喰つてかゝるよ。』

お清も老母と同じ心配。(一四六頁)

長文であるにもかかわらず引用したのは、ここには中産階級の下層民への理由もない拒否感、差別感がいみじくも現れているからである。老母と義妹のお清は、磯吉をまるでやくざか何かのように思い、そしてそんな男と同棲している女を、炭を盗んだといって捕まえたりしたら大変な目に遭うと、女中のお徳に対して下手に騒ぎ立てないように諭すのである。これは明らかに下層民と関わりを持つとしない傍観者の意識である。

お源の死をめぐっては、貧しさ故の悲惨な死<sup>96</sup>、あるいは盗みに対する倫理的な死<sup>97</sup>など、様々な見方がある。が、大庭家の人たちがお源の盗みを知っていたながらも、お源に対して何も言わなかった傍観者の態度を見逃してはならないであろう。言い換えれば、お源を自殺に追いつめた原因には、どん底の貧しさや盗みへの罪の意識もさることながら、お源のような最下層民は盗みを働いても当然だと思ふ大庭家の人々の態度があったのである。

一方、「ファスブン」の主人も、「竹の木戸」の真蔵と同じく行動らしい行動は何もしない。△私▽の家族は真夜中、下男部屋から男の泣き声が聞こえると、

「あれは……。誰か泣いていないか」

「アボムだわねえ」

私はぱっと起き上がった、耳をそばだてた。まさしく、アボムの泣き声だ、下男部屋に住んでいるアボムの泣き声だ。

「どうして泣いてるんだらう。男のくせに。田舎から不幸の知らせでもきたのかな。それともいやな目にもあったのかな」

私は「おい、おい」せき上げつつ泣く声を聞きながら家内に尋ねた。

「なんでアボムは泣いてるんだらう」

「そうね、どうしたんでしょうね」(一四七頁)

「何でアボムは泣いてるんだらう」「そうね、どうしたんでしょうね」とは

言うものの、彼らは下男部屋に赴いてアボムにそのわけを聞くことはしない。△私▽は暖かい部屋のかなで同じ敷地内に住んでいるアボムの慟哭の理由をあれこれと想像するだけであって、真夜中に泣かねばならない彼らのせっぱ詰まった事情を知ろうとはしない。次の文はファスブン一家に対する△私▽の傍観者の態度が端的に示されたものといえよう。

われわれは、今はじめて、アボムが昨日泣いたわけを知り、この時やっ  
と、アボムの名前がファスブンであり、楊平の人だということを知った。  
(二〇二頁)

△私▽は下男部屋にファスブン一家を住ませながらも、ファスブン一家がどういう人たちなのかについては全く関心を示さなかった。引越してから二ヶ月が過ぎ、しかも真夜中の泣き声を聞いたことからようやく彼の名前や彼が置かれた境遇を知ったのである。こうした傍観者の態度は、ファスブン一家が生活に苦しんでいるのを見ても、スプーンや茶碗を貸す程度で、それ以上、つまり貧困から抜け出す努力をするようにアドバイスをするというようなことはいっさいしないところにも明白に現れている。言い換えれば、△私▽はファスブン一家に対して同情の気持ちはあっても、彼らの貧困に対しては無関心である。だからこそ、ファスブンの子供を「誰かにくれてやったらどうだろう」とまるで他人事のような発言をするのである。こうした傍観者の立場は、ファスブンが妻と末の子を置いたまま田舎に行ってしまう場面に鮮明に表されている。

「旦那様、行って参ります。田舎のお兄さんが仕事中に斧で足を切つて怪我をしましたので、行ってみなくちゃなりません。収穫が済んだらすぐ戻ります。あとのことは、ただもう旦那様だけを頼りにしています。」私はどう返事していいか分からず、「そんなら、気をつけてな」といった。アボムはもう一度お辞儀をすると、「ご免下さいませ」といいながら出ていった。

「あんなふうに出してしまつて、どうします。うちも楽じゃないのに、どうやってあの人の家の世話をしやるおつもりなの。そんなにすぐ帰ってきますかね」

こう心配する家内の言葉を聞いて、私は直ぐ表へ出てファスブンを呼び止め、

「すぐ帰って来るんだよ。冬に入るようではだめだよ」(二〇二頁)

ここでは、△私▽の、残されたファスブンの家族の面倒を見ることだけはさけたいという気持ちが強くて出ている。このような面倒を回避しようとする△私▽の態度には、他人の不幸よりも自らの安定した生活を壊したくないという意識が強くて出ている。つまり、△私▽はファスブン一家の境遇に同情はしても、彼らを助けようとはしない傍観者なのであった。

以上のように、「竹の木戸」と「ファスブン」ではともに、それぞれの語り手は、井戸を使わせてやるなり、下男部屋を使わせてやるなりと、本来は主人公たちとより密接な関わりを持っているはずである。しかし、大庭もファスブンの主人も、結局何もしない。木戸から向こうをかいま見ること、下男部屋と自分の家の間に一線を画すことも、貧困による死にも、そして同情するのみであることも、すべて傍観につながっていく。そして周囲の人たちがそのように傍観するだけなので、貧しい人たちの苦しみはますます深刻になるのである。

#### 四、△新中間層▽と中流意識、そして傍観者へ

戸松泉氏は、大庭貞蔵がお源が炭を盗む現場を目撃したにもかかわらず見ないふりをするのを消極的態度とし、「面倒を回避しようとする自己防衛的論理によるものと見なしている。そして、真蔵の中に、「ひたすら自らの生活や、自らの現在の安定を守ることを第一義とする小市民的な生活意識<sup>20</sup>」を見いだしている。このような小市民的な生活意識は、産業革命の進行に伴って現われた△新中間層▽といわれる中産階級に顕著である。△新中間層▽と

は、官庁や企業に勤める高学歴のサラリーマンを中心に形成された新しい社会層を指すが、隅谷美喜男氏は△新中間層▽の特徴を次のように述べている。

産業革命の進行は、日本の社会に一つの新しい社会層を生み出した。其れは教養の点でインテリと呼ばれ、職業の上ではサラリーマンといわれる新しい中産階級である。

明治政府が曲がりなりにも近代国家としての体裁をととのえていくためには、行政技術を身につけた官僚や司法制度に習熟した司法官や弁護士、更にそれらの補助者が必要であった。また近代的な経営を運営していく為には、多数の技術者や事務員が必要であった。農村の小地主や富農の子弟や、旧士族の中の一部の子弟が、中等教育や高等教育を受けて、この新しい社会層を形成していったのである。

彼らは小学校以来、新しい教育制度の中で育てられ、その教養において欧米の個人主義的思想に触れた新しい知識層であった。日本の近代社会の構造に対応して、かれらは大都会に居住し、そこで伝統から比較的解放された生活を営んでいた<sup>21</sup>。

隅谷氏によれば、△新中間層▽は新しい教育制度の下で育てられ、欧米の個人主義的思想に触れた新しい価値観の持ち主である。つまり、△新中間層▽の人々は、仲間意識や助け合いなどに代表される家族共同体的価値観よりも、面倒なことにはできるだけかわらうとしない自己防衛論的価値観を優先し始めるようになった階層である。すでに見てきたように、女中のお徳が掛けた罫によってお源の盗みが発覚したとき、できるだけことを荒立てまいとする大庭家の人々の態度は、まさに自己の生活を優先する自己防衛論的倫理に基づいたものである。まったく同じことが「ファスブン」にも言える。

既に見てきたように、ファスブンが主人の家に家族を残したまま田舎に行ってしまうと、△私▽の妻は、「うちも楽じゃないのに、どうやってあの人の世話をしやるおつもりなの」と口をこぼす。これは明らかに下男部屋家族を負担に思い、できるだけ関わりたくないという自己防衛的意識にほか

ならない。

一九二〇年代に入ると、△私▽のような、助け合いや仲間意識、他人を思いやるといった家族共同体的価値観とはほど遠い、いわば自己の安定した生活こそ第一義だと考える人物が小説の中に現れるようになるが、その最初の人物として読者に提示されたのが「ファスブン」の語り手であろう。では、いったいなぜ彼らは自己の安定した生活を第一義と考えて行動するようになったのか。次の文は中産階級の人たちがそのような行動をとるようになった背景を知る上で非常に示唆に富んでいる。

欧米なみの△一等国▽をめざす日本のイメージリーダーとしての△新中間層▽は、職住分離と同時発生した消費生活、その生活を経済的に保障する国家、資本との真面目に働く／月給という雇用関係など、徹底的に近代資本制の産物なのであるが、そのライフスタイルは社会、経済構造の激変を経た国民の目指すべき対象としてイメージされていた。国家と資本の要請もともないメディアの言説が△中流▽への欲望を煽動し、真面目に働く、その△生活倫理▽こそが△中流▽への道として流通していくことになる。

余呉育信氏によれば、△新中間層▽の人々は真面目に働くことによって中産階級への道をつかんだのである。彼らは東京の郊外で庭付きの一戸建ての家に暮らし、物価が高いと言いながら上等の佐倉炭を使い、女中も使うほど経済的に安定した生活を送っている。しかし、だからといって特別に金持ちというわけではない。まじめに働いているからこそ今のライフスタイルを維持できるのであって、最初からそのような生活をしているわけではない。このことは言い換えれば、まじめに働けば誰でも△新中間層▽のライフスタイルが手に入る一方、そうでなければどん底の貧しい生活が待っているということを意味している。「竹の木戸」には、磯吉夫婦が貧困に陥ったのは気まぐれに仕事を休むせいだという件がある。

『これじゃ唯だ食って生きてるだけじゃないか。餓死する者は世間に滅多にありや仕ないから、食って生きてるだけなら誰だつてするよ、それじゃ余り情けないと私は思ふわ』涙を袖で拭て『お前さんだつて立派な職人じゃないか、それに唯だ二人限の生活だよ。それが如何だらう、のべつ貧乏の仕通しで、其貧乏も唯の貧乏じゃ無いよ。満足な家には一度だつて住まないで何時でも斯様な物置かー』(中略)

『そんなら何故お前さん月の中十日は必然休むの？お前さんはお酒は呑まないし外に道楽はなし満足に仕事に出てさえお呉なら、斯様な貧乏は仕ないんだよ。』(一四九頁)

磯吉は立派な職人であるばかりでなく、お酒もほかの道楽もしない。仕事にさえまじめに出れば十分やっていけるはずである。にもかかわらず、磯吉は月に十日も仕事を休んでしまう。植木屋という仕事柄、天気は左右されることもある。しかし、作者はそうした理由ではなく「お前さんが最少し精出してお呉なら此節のやうに計量炭もろくに買ないやうな情けない、」というように磯吉を怠け者と位置づけている。こうした視点には、明らかにまじめに働くことこそ正義だという「生活倫理」が働いているといえよう。

一方「ファスブン」の場合はどうであろう。ファスブンの貧困の主な原因は子供を抱えていることと不況で仕事がないことである。しかし作者は、ファスブン一家が乞食同然の暮らしをするようになった原因を次のように分析している。

お舅さんが生きておられるときは、米の百石も作っていて、三人兄弟が楊平で人並み以上の暮らしをしたんですよ。(中略)それが、私が嫁いでは、お舅さんが亡くなり、上の兄さんが死に、百姓仕事のものである牛一頭を盗まれるといった具合で、段々と暮らしが傾き始め、とうとうこんな乞食同然の姿になってしまいました。(二〇二頁)

つまり、ファスブン一家は、舅と兄が相次いで亡くなり、さらに農作業の

もとである牛を盗まれるという偶然の出来事が重なって次第に家計が傾いていったのである。韓国における農民の没落の原因が、一九一〇年の日韓併合とともに始まった土地調査事業によるものであることはよく知られている事実である。しかし、作者はそういった社会的・経済的現状には全くふれず、むしろファスブンの個人的な問題だとしている。次の文はそんな作者の意図を如実に示している。

アボムは夜明け前にチゲをかついで家を出、夜暗くなってから戻ってくるのだが、日に二度の食事にもこと欠く始末で、たいていは仕事にあぶれて、明け方に出かけても正午ごろになれば戻ってくる。戻ってきてはたいていは寝てしまふ。こんな時は、あくる朝まで何も食わない。(一九九頁)

ファスブンは夜明け前に出かけて夜暗くなって戻ってくる。つまり、一生懸命に働いているにもかかわらず「日に二度の食事にもこと欠く」貧乏暮らしをしているのである。当時農村から都市にやってきた没落農民達は、貧民窟を転々としながら荷物運搬屋、人力車夫、くず拾いなどの仕事についていた。しかし、都市に集まる農民が急激に増えるにつれて仕事の奪い合いが激しくなり、街には失業者があふれていた。ファスブンが仕事にあぶれて昼間から家に戻ってきたのはこうした社会的背景がある。しかし、作者はあえてそのことに触れず、仕事にあぶれて昼頃帰ってきたファスブンが手持ち不沙汰に昼寝をすることのみを描くことによって、貧困の原因を個人の問題に帰している。

従来、貧困の原因は怠惰、無知などの個人的責任や天災その他にあるとされてきた。しかし、資本主義の進展とともに社会そのものにその責任があると考えられるようになった。ところが、「竹の木戸」と「ファスブン」では、貧困の原因を、甲斐性のない主人公の個人的問題だとして、あえて社会問題に切りこんでいない。ここにこの二作品の意図、すなわち貧困の社会的・経済的問題に目を向けない傍観者の態度を見ることができる。

独歩と田榮澤は、「中産階級」のまじめに働くことが正義だという「生活倫理」が社会に流通するにつれて、磯吉やファスブンのように「物置同然」の小屋でその日の食事にもこと欠く「乞食同然」の生活をする、いわゆる下層社会の貧民たちが、「落伍者」や「怠け者」として社会から切り捨てられていく現実を見ていたのではなからうか。「竹の木戸」と「ファスブン」はそうした貧民への差別や傍観者の態度が、中産階級を中心に広がりを見せ始める様相を最初に描いたものとして注目に値する作品である。

以上のように見てくると、「竹の木戸」の「大庭」と「ファスブン」の「私」は、隣りに住む貧しい家族に、井戸を使わせてやったり、下男部屋に住まわせてやるなどして同情はする。しかし、いざ彼らが助けを求めると、自己の安定した生活を優先して回避してしまふ、いわゆる傍観者なのである。つまり、語り手は傍観者である。同情するだけの余裕はあるが、救済するだけの力はない。社会の主流となりつつあった、中産階級の人たちの共通の認識がここにあるのかもしれない。近代化されて、次第によくなっていくはずの世のなかではあるが、絶望的な貧困はなかなか根絶されない。中産階級の間には、傍観者にならざるを得ない、そのような共通の認識が社会に形成されていたのではないだろうか。貧困のみならず、社会の時事問題に関心はあるにもかかわらず、実際は事なかれ主義の傍観者に過ぎない。独歩と田榮澤は、その社会の現実を描いたのである。

##### 五、新たな都市文学の台頭——結びに代えて

田榮澤の「ファスブン」は、ソウルを舞台に、中流家庭と貧困にあえぐ家庭の二つを対照的に描き、植民地下の一九二〇年代頃の韓国社会の現実を浮き彫りにした作品である。一九二〇年代頃の韓国社会は、近代化政策によって伝統的な農村経済が破綻し、貧乏に耐えられなくなった農民達が大量に都市に流れ出て都市下層労働者と化していた。文壇では、ファスブン一家のように、貧しい農村から裕福な暮らしを夢見て都会に出ていった農民たちが、豊かな生活を手に入れることなく、そのまま貧民層に入り、都市下層労働者

に転落していく過程を見つめる作品が多く現れるようになった<sup>80</sup>。中でも、田榮澤の「ファスブン」は、主人公が貧しい農村から豊かな生活を夢見て都市へ移住するが、都市でも貧乏から抜けられず、結局は悲劇的な死を迎える事実をことさら誇張することなく淡々と描いたという点で自然主義の代表的作品と評価された<sup>81</sup>。

こうした評価に対して、林鍾国氏はその著『韓国文学の民衆史―日帝下文学の民衆意識』（実践文学社、一九八六）の中で、「ファスブン」は、当時都会の下層社会の至る所で繰り広げられていた貧困の事実をただ提示しただけであって、それらの状況を生みだした社会矛盾の深部に分け入ろうとしなかった作品であると批判し、田榮澤の文学的特質を植民地下の現実を傍観した「非情な傍観者の文学」と断定した<sup>82</sup>。

しかし、「ファスブン」が独歩の「竹の木戸」の影響を受けて執筆されたという事実が明らかになった以上、この作品を単に「非情な傍観者の文学」と批判するわけには行かないであろう。田榮澤は、二度目の日本留学中に、「竹の木戸」の大庭真蔵のように、どん底の貧困にあえぐ植木職人の境遇に同情しつつも、決して彼らの生活にわけ入ろうとしない、いわゆる新中間層の存在を知った。そして帰国後、貧民や貧困問題に対して、同情するだけの余裕はあるが、救済するだけの力は持っていない新中間層が、韓国社会にも台頭しつつあることに気づいた。

ところが、文壇では相変わらず下層民のどうにもこうにもやりきれない悲惨な貧困生活を描くだけの貧困文学が幅をきかせていた。こうした文壇へのささやかな抵抗として「ファスブン」は執筆されたのである。

日韓併合後、日本の経済的収奪によって朝鮮半島の「窮乏化」が推し進められていく中、インテリ・サラリーマンといわれる新しい都市中産階級が現れて社会の主流となり始めた。彼らは新しい教育制度の中で育てられ、官僚や銀行員、会社員などのホワイトカラーの仕事に従事しながら大都市に居住し、個人主義、無関心、社会的孤立、不安などといった都市的パーソナリティーを特徴とする生活を営んでいた<sup>83</sup>。「ファスブン」の語り手の八私Vは、まさしくこの都市的パーソナリティーを持ち始めた最初の人物なのであった。

この八私Vの人物造形に国木田独歩の「竹の木戸」の大庭真蔵が大きく影響していることは、すでに見てきたとおりである。

注

- (1) 五味文彦・高林利彦・鳥梅靖編、「近代国家の成立」(『詳説日本史研究』山川出版社、一九九八) 三七―三八一頁。
- (2) 立花雄一「底辺ルポルタージュ文学の発生と展開」(『明治下層記録文学』ちくま学芸文庫、2002年) 一一七―一三〇頁。
- (3) 立花雄一「底辺ルポルタージュと日清戦後文学」(『明治下層記録文学』ちくま学芸文庫、2002年) 一三二―一七六頁。
- (4) 山田博光「文学の制度的確立と再編」(『二十世紀の日本文学』白地社、一九九五) 四一―四五頁。
- (5) ソウル特別市編纂委員会「社会」(『ソウル600年史・民俗編』三和出版社、一九八一) 二〇七―二二三頁。
- (6) ソウル特別市編纂委員会「市民生活」(『ソウル600年史・第四巻』三和出版社、一九八一) 一一八―一八五頁。
- (7) 金鉉・金充植「個人と民族の発見」(『韓国文学史』民音社、改訂版二〇〇一)。
- (8) 趙鎮基「崔曙海と貧困の文学」(『韓国現代小説研究』学文社、一九九二)。  
・白鉄「新文学の分かれ道」(『新文学思潮史』新丘文化社、一九八〇)。  
・林鍾国「貧しい人たちの距離」(『韓国文学の社会史』正音社、一九九七)。  
「貧しい現場の傍観―田榮澤「ファスブン」」(『韓国文学の民衆史』実践出版社、一九八六)。
- (9) 拙稿「愚者文学としての「春の鳥」―田榮澤「白痴か天才か」と独歩「春の鳥」(『比較文学』第四五巻、二〇〇三)、「白痴教育と文学―国木田独歩「春の鳥」と田榮澤「白痴か天才か」との比較文学的考察」(『文学研究論集』第十号、一九九六)。
- (10) 林鍾国「貧しい人たちの距離」(『韓国文学の社会史』正音社、一九九七)。  
『東亜日報』一九二七年三月六日。

- 『東亜日報』一九二四年十一月二六日。  
 『東亜日報』一九二四年十二月二九日。
- (9) 国木田独歩「竹の木戸」(『国木田独歩全集・第四卷』学習研究社、一九九六)一三三—一三四頁、以下頁数のみ表記。
- (10) 西川裕子「生きられた家・描かれた家」(『借家と持ち家の文学史』三省堂、一九九九)五八—五九頁。
- (11) 横山源之助「東京貧民の状態」(『東京の下層社会』岩波文庫、一九九七)二二—七六頁参照。
- (12) 田榮澤「ファスブン」(『田榮澤全集』牧園大学出版部、一九九五)一九八頁、以下頁数のみ表記。
- (13) ソウル特別市編纂委員会「市民生活」(『ソウル六百年史・第四卷』)。鮮干全「朝鮮人生活問題の研究」(其の二)『開闢』一九二〇年三月号)キジン「京城の貧民—貧民の京城」(『開闢』四八号)。
- (14) ソウル特別市編纂委員会「日帝侵略期の社会階層」(『ソウル六百年史』)。「この現象をどう救えばいいのか」(『東亜日報』一九二四年十二月二十九日社説)。
- (15) 山田博光「国木田独歩集注釈・竹の木戸」(『日本近代文学大系・国木田独歩集』角川書店、昭和四五年)。
- (16) 長谷川泉「竹の木戸」(『国文学・解釈と鑑賞』昭和三二年二月号、至文堂)。「東亜日報」一九二四年十二月二九日。
- (17) 林鍾国、前掲注(6)に同じ。
- (18) 山田博光、前掲注(16)に同じ。
- (19) 長谷川泉「竹の木戸」(『国文学・解釈と鑑賞』昭和三二年二月号)。
- (20) 趙鎮基「崔曙海と貧困の文学」(『韓国現代小説研究、学文社』一九九二)一六七頁。
- (21) 林鍾国、前掲注(6)に同じ。
- (22) 戸松泉「晩年の独歩—「竹の木戸」論—」(『東京女子大学紀要』昭和六一年三月)二七—八頁。
- (23) 山田博光、前掲注(16)に同じ。
- (24) 長谷川泉、前掲注(16)に同じ。
- (25) 戸松泉、前掲注(21)に同じ。
- (26) 隅谷三喜男「考えるホワイトカラー」(『日本の歴史・22巻』中央公論社、昭和四一年)二九四頁。
- (27) 余呉育信「『竹の木戸』の△空間▽/新たな△忘れえぬ人々▽の物語」(『日本文学を読みかえる・12都市』有精堂、一九九五)五七頁。
- (28) 「都市貧民層の発生」(『ソウル六百年史』)二〇七—二二三頁。
- (29) 小沼正「貧困」(『平凡社大百科事典』)八一五頁。
- (30) 玄鎮健の「運のいい日」(一九二五)「故郷」(一九二四)、崔曙海「餓芽餓」(一九二五)「恐ろしい印象」(一九二五)、(朱耀燮「人力車」(一九二五)など)。
- (31) 白鉄「新文学思潮史」新丘文化史、一九八〇、三一五—三二八頁。
- (32) 趙南鉉「韓国現代文学史」成文閣、一九八五、二九四—三二六頁。
- (33) 金鉉、金充植「韓国文学史」民音社二〇〇〇、二二〇—二三〇頁。
- (34) 金宇鍾「韓国現代小説史」成文閣、一九九二、二二二—二三二頁。
- (35) 林鍾国、「貧しい現場の傍観」(『韓国文学の民衆史』実践文学史、一九八六)六一頁。
- (36) 李康彦「廉想渉小説の都市性研究—一九二〇年代作品を中心に」(『韓国現代小説の展開』螢雪出版社、一九九二)三九頁。

(二〇〇三年十月三十日受理)